中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1271

その驕り（老病死についての驕り）は、人間にとって本質的なものだ。そうして空虚なものである。いつかは崩れ落ちる。

（中村元）

＜解説＞続けて次のように言う。それを自覚するなら、若いうちにすべきことは若いうちに、健康なうちにできることは健康なうちにしておこう。病気になってもできることがある。和顔愛語で他人に接することなら、病人や老人にもできるはずである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1272

〔寿命を全うしないで死ぬ理由は〕食物としてはならないものを食物とする。食べる量をはからないこと。習慣に従わないで食事する。食物を消化しないことである。

（『仏説九横経』）

＜解説＞命が尽きていないのに死んでしまう理由。これらに注意すれば寿命を全うできる。避けるべきは、よくないものを食べ、分量を知らず、季節に合わないものを食べ、食物を消化しないこと。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1273

〔寿命を全うしないで死ぬ理由は〕熟するのを止める。戒めをたもたない。悪友に近づく。適当なときでないのに村落へ入る。さけるべきことを避けないこと。

（『仏説九横経』）

＜解説＞命が尽きていないのに死んでしまう理由。最初の「熟するのを止める」とは、大便や小便を我慢する、あくび・吐くこと・くしゃみ・おならなどが出そうなとき我慢して出さないことだと説明されている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1274

おおよそ弁道工夫のためには、病中程よきことは此れ有るべからず。

（正受老人）

＜解説＞誰もが避けることができない病気。では、実際に病気になった時の心構えは何であるか。あれこれと考えてしまうこと（妄念）によって、さらに病を重くしないこと。また、ここでは、自己を究明するためには、病気のときほど、よい機会はないと述べている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1275

我は良医の病を知って薬を説くがごとし、服と不服とは医の咎に非ず。

（『仏遺教経』）

＜解説＞教えとは実践して初めて身につき人をよき方へ導いてくれる。ここでは教えとは医者が病状を知って適した薬を与えるようなものだという。ただ、それを服用するかどうかは患者の責任である。それと同じで、教えは身をもって体現しなければならない。実践の重要性を教えていることば。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1276

つねに心を落ち着けて、食物を得ても食事の量を知っている人は、もろもろの苦痛の感覚は弱まっていく。寿命をたもちながら、徐々に老いる。

（釈迦）

＜解説＞大食の王がいた。これは彼に対するブッダのアドバイズ。王は食事のたびにこの言葉を唱えさせたところ、食事の量が減り、身体が軽やかになった。避けられない老死だから、「寿命を保ちながら、徐々に老いる」は理想的だ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1277

世の学者たちは、めいめいの見解に固執して、互いに異なった執見をいだいて争い、みずから真理への熟達者であると称して、さまざまに論ずる。

（釈迦）

＜解説＞ある人が「最高の教えだ」と言うものを、他の人は「劣っている」と称する。互いに執見をもち論争するのは間違い。また、非難されるから劣っているというなら、すぐれたものは一つもないことになる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1278

思弁の密林、思弁の難路、思弁の見せもの、紛争、束縛。それは苦しみをともない、破滅をともない、悩みをともなう。

（釈迦）

＜解説＞間違った議論は、ほんとうに大切なことを見えなくする。そのようすは、「難路」「密林」などに例えられる。入っていくと自分がどこにいるのかわからなくなり、抜け出すことがむずかしくなる。それによって、安らぎに近づくことはできない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1279

もし種種に戯論せば、其の心則ち乱る。復出家すと雖も猶未だ脱することを得ず。是の故に比丘、当に急に乱心戯論を捨離すべし。

（『仏遺教経』）

＜解説＞「戯論」とは「戯れの議論」。戯論すれば、心は落ちつきをなくし、正しい道からは外れる。たとえ出家しても安楽の境地を得ることはない。だから、すみやかに心を乱すもとである戯論を捨てるべきである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1280

「わたくしはこのことを説く」、ということがわたくしにはない。もろもろの事物に対する執著を執著であると確かに知り、もろもろの偏見における過誤を見て、固執せず、省察し、内心の安らぎをわたくしは見た。

（釈迦）

＜解説＞「わたしが」にこだわっているため、正しく見えず、他を認めないことになる。本当に大事なのは何か。そこには、真実を見る大切さが忘れられてはいないか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1281

真実は一つであって、第二のものは存在しない。その（真理）を知った人は、争うことがない。

（釈迦）

＜解説＞真実は一つであっても、そこへ至る道は一つとは限らない。たくさんの方法があってもよい。しかし、みずからの解釈や考えに固執し、その道にこだわり、他を認めない態度は対立を生む。「山頂は一つでも、そこへ至る道はいくつもある」ともいう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1282

辱められ、その（不快な）ことばを多く聞いても、あらあらしいことばをもって答えてはならない。立派な人々は敵対的な返答をしないからである。

（釈迦）

＜解説＞「耐え忍ぶ」（忍辱）という態度の重要性を述べる。忍辱とは「屈辱にも堪忍して大願に生きること、辱めにも耐える」という。根底に「大願」（大いなる願い）があるから、ほんとうの「忍辱」が可能になる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1283

人々、悉く道器なり。

（瑩山紹瑾）

＜解説＞道器とは「道を成就する器、資質がすぐれていること」。どのような人でも真実の道を実践し歩むことができる器である。そのような力、可能性を誰もがもっていると教える。大切なのは可能性としての力を生活の中に生かし、働かせること。そして、誰もがその器であると信じ、気づくことである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1284

朋友・親友に憐れみをかけ、心がほだされると、おのが利をうしなう。親しみにはこの恐れがあることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め。

（釈迦）

＜解説＞決して親友はいらないというのではない。親しみに固執すると、情に引きつけられて、自由な考えや行動ができなくなる。縛られてしまう。自分自身の軸が揺らいで、主体性が相手へと移ってしまうのが問題だという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1285

もしも、汝が賢明で行儀正しい明敏な同伴者を得たならば、あらゆる危難に打ち克ち、ここころ喜び、気を落ちつかせて、かれとともに歩め。

（釈迦）

＜解説＞自己の目的を理解してくれる人なら、おたがい「相手の自立を認め敬意を払う」がゆえによい仲間となる。しかし、そのような朋友を得ることができなければ、正しい生活をして、犀の角のようにただ独り歩めという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1286

人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患う。

（『論語』）

＜解説＞他の人が自分をよく理解してくれないからといって、そのことで落ち込みクヨクヨしないほうがいい。私のことを知ってほしい、認めてほしいという気持ちは当然の心情だが、それより、自分自身が他の人びとをよく理解できていないのが問題ではないだろうか。「人を知る」が自分としてできる第一歩といえるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.6.17 中村元記念館協力